

[東京都] 足立区立新田学園 (併設型)

足立区立新田小学校
足立区立新田中学校

しんでん

1. 学校 (区) 概要

- 教育目標：自ら学ぶ人、共に生きる人、健やかでたくましい人
- 所在地：足立区新田3-34-2
- 施設形態：施設分離型
- 児童生徒数 (R3.9.1時点)



学年	小学校								中学校					小・中計
	1	2	3	4	5	6	特支	計	7	8	9	特支	計	
児童生徒数	180	184	190	227	228	216	10	1235	200	180	181	8	569	1804
学級数	6	6	5	6	6	6	2	37	6	5	5	1	17	54

2. 導入経緯

- 平成17年 構造改革特別区域計画「小中一貫教育による人間力育成特区」の認定
- 平成17年 学校部会・まちづくり部会などで地域との対話スタート
- 平成18年 基本構想作成
- 平成22年 足立区初の小中一貫教育校「新田学園」として開校

3. 小中一貫教育の取組概要

ねらい

- 足立区の小中一貫教育は「確かな学力の向上」と「心の教育の充実」によって、自立した一人の人間として、力強く生きていくための「人間力の育成」を目指して、展開されることとなった。9年間一貫したカリキュラムによって小中の連続性をもたせるとともに、小中の教員間の連携による教育効果の向上、教育方法や内容を変えていくまとまりを4-3-2制とすることなどを通じて、個に応じた教育を実現する。

施設活用 (施設隣接・施設分離型の場合)

- 平成25年に児童生徒数増加により第二校舎開設
- 校長は、第1校舎と第2校舎を行き来
- 第1校舎と第2校舎の距離は240m (徒歩3分)



第1校舎	第2校舎
5年生～9年生	1年生～4年生
生徒1013名	児童791名
教職員93人	教職員88人

教職員体制

- 管理職：校長1名、副校長4名
- 教職員：兼務発令は、全教職員に行われている。

教育課程特例・区切り・区切りを意識させる学校行事等

- 教育課程特例：なし
- 区切り：子どもの発達に即して9年間を3期4-3-2制に区分
 - I期 (4年) …「学びの基本姿勢」を目指し、基礎基本の定着、生活習慣・学習習慣の定着を図る
 - II期 (3年) …「意欲的な学習姿勢」を目指し、基礎基本の徹底、思春期の課題に対応する
 - III期 (2年) …「主体的な学習姿勢」を目指し、自主・自立の態度の育成を図る
- I期終了の区切りとして4年生はレンジャー活動 (児童会活動) を設定し、II期のリーダー活動につなげる

運営概要

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年
学年区分	I期			II期			III期		
校時	45分授業						50分授業		
主な行事	全体行事								
制服	校帽						制服		
クラブ活動	課内クラブ								
				部活動			部活動		
教科担任	学級担任						教科担任		
児童・生徒会活動	リーダー活動			委員会活動					
P T A	学園PTA								
	小学校PTA						中学校PTA		

教科担任制・教員の相互乗り入れ指導

- 厳密な教科担任制ではないが、小学校高学年に定期考査を導入することで、一部教科担任的な状態を実現

市町村教育委員会等による支援

- 足立スタンダード (※) に基づく授業実現のために専門員 (教員OB) が巡回し、教員に指導・助言
- ※足立スタンダードとは、「授業におけるめあて」を明確にし、一人ひとりがしっかりと考え、子ども同士で学び合う問題解決型の授業を実現することで、学力向上を図る取組み

テーマ：小中一貫で実現する「確かな学力の向上」

【目指すこと】 知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力を鍛え、
学びに向かう力・人間性等を育む義務教育を行うこと

(そのために行っている主たる具体的な実践)

小学校高学年からの教科コンテストの実施

- ・ 問題は、定期考査との役割分担で知識・技能を問うもの。
 - ・ 実施の頻度は、年間10回（うち小学部8回）。
 - ・ 国語は漢字、算数は四則計算、理科・社会はeライブラリーから復習を中心に問題を出題。
 - ・ 合格しない場合には放課後補充教室（※）で補習を受ける。
- ※放課後補充教室とは、教科コンテストで基準点に満たない児童生徒や、自主学習（家庭学習）ノートの未提出児童生徒を対象に週2～3回取り組む補充学習。

小学校高学年における定期考査の実施

- ・ 問題は、教科コンテストとの役割分担で、思考力・判断力・表現力を問うもの。
- ・ 実施の頻度は、前期中間・期末、後期中間・期末の年4回である。例えば、外国語ではライティングの他中学部同様リスニングも含めた問題を出題。
- ・ 指導と評価の一体は、問題を作成してみても初めて実現できるという理念のもと、小学校の教員複数がチームで定期考査の問題の作成を行う。

(実践から特に得られたこと)

児童・生徒の「個」に応じた指導による 学習機会の提供

- ・ 早期につまずきを発見し、放課後補充教室で異なる学力層の子供に対応した個別指導を実施することにより、課題を解消することができた。
- ・ 合格基準点を超えることで、「できるようになった」「わかるようになった」という気持ちや、自己肯定感につながることができた。

「指導」と「評価」一体とすることによる 教員一人一人の指導力の向上

- ・ 小学校には定期考査の問題作成のノウハウがなかったため、中学校の教員に学び、その過程で教科理解が深まった。
- ・ 問題作成は、どのように指導を行うかを振り返ることでもあり、問題作成をすることにより、学年で統一した指導内容と、教員一人一人の指導力の向上、授業改善にもつながった。

児童生徒に生じた小中一貫教育の「良さ」

認知能力、非認知能力両面から基礎的な素養を身に付けることができる

- ✓ 2つの具体的な実践をきっかけに、小学校教員の全人教育ができる良さ、中学校教員の教科指導ができる良さを双方に取り入れ、互いに補い合い、小学校高学年で両方の良さを活かした移行期間を設けることにより、義務教育9年間で小中両方の教員で全人教育を行いながら、基礎学力の定着を図ることができる。例えば、新田学園で9年間育った現9年生は、今年度の全国学力調査（数学）において上位の成績を収める結果となったことも、その成果とらえている。
- ✓ 特に、非認知能力という点では、小学校高学年が中学生の姿を見て学べる、ロールモデルが近くにいる、という点が大きくプラスに働いている。例えば、中学校3年生が体育祭などで発揮する、努力したからこそ得られた強さ、速さなどは、小学校の児童にとっては、「憧れ」「こうなりたい」と思うきっかけになる。教員がどんなに教室で情報として伝達するよりも心に響く、内在的な動機となって、「学び」につながっている。

これまでの成果と課題、今後の取組み

- 小中一貫教育校での学びの深まりは、学力の向上という点で効果的に働いたが、さらなる展開のために、教職員の共通行動、また、指導力向上が必要不可欠である。
- 小中一貫教育校のよさを児童・生徒も体感できるよう、「体育祭・運動会」「合唱コンクール・学習発表会」などの学校行事を見直すなど、既成概念から脱却して小中一貫教育校のよさを前面に打ち出せるような改革を進める。